

第2回輪島塗の若手人材の養成施設の整備等に関する基本構想策定委員会 議事概要

- 1 日 時 令和7年7月7日（月）13：30～15：00
- 2 場 所 能登空港ターミナルビル4階 42・43会議室
- 3 出席委員 名簿参照
- 4 議事概要

（1）説明事項

事務局から資料に基づき説明

〔輪島塗の若手人材の養成施設の整備等に関する基本構想（素案）等〕

（2）意見交換

- 産地の作り手は、震災前から高齢化が進んでいるなかで、能登半島地震と奥能登豪雨で大きな被害を受けた。輪島塗の作り手は産地の宝であるため、産地全体で担い手の育成に取り組まなければならない。
- これからの輪島塗にとって海外展開は重要だが、養成施設や漆芸技術研修所を卒業しても自分ひとりの力で海外展開に取り組むのは非常に難しい。そういう意味では、漆器組合の若手の塗師屋が海外へ行く勉強をし、それが輪島塗の職人を育て、輪島塗そのものも成長していき、世界一の輪島塗になることにつながるのではないか。
- 輪島塗の長い歴史と文化が、これまでに破壊されることなく継承されてきたことに価値がある。創造的復興に向けて、この伝統の継承と海外市場の開拓の両立をどう図っていくかが鍵。そのため、準備段階の今のうちから海外展開のための勉強会を開催したらどうか。日本の工芸の水準の高さを知っていて、かつ海外市場にも精通した方等を講師として輪島に招いて、養成施設のカリキュラムをどう具体化していくのか、伝統の継承と海外市場の開拓の両立をどう具体化していくのか、準備したらどうか。こうした取組みの過程でネットワークが充実し、理想的な形で伝統の継承と海外展開が実現されていくのではないか。
- 後継者確保と市場開拓、魅力発信の3つの柱があるが、特に地元としては、後継者確保の観点から、地元の子どもたちが輪島塗に関わる仕事をしたい

とさせていただけるよう、これまで以上に、地元への輪島塗の魅力発信をしっかりと取り組んでいただきたい。そうすることで、一時的な取り組みに終わらず、輪島の産地が未来に残っていくことに繋がるのではないか。

- 国内市場が縮小していく中、グローバルの世界の中でいかに海外展開をして世界を相手にビジネスできるかが鍵。輪島塗は分業制であり、それを取りまとめる塗師屋という存在がいることが特色。海外展開においても塗師屋にいかに活躍できるようにすることが大きいのではないか。また、インバウンドで購入されたものも輸出になる。海外展開を図るうえで需要が伸びているインバウンドをいかに取り込むのかということも重要。成功している産地では、製造工程を見せるだけではなく、海外旅行客と職人がコミュニケーションを取れる場を設けている。これも大きいポイントなのではないか。
- ハード整備には時間がかかるがソフト面はどんどん先に進められる。今年度から海外展開に関する勉強会や研究会を実施し、試行錯誤しながら進めていくべきではないか。また、石川県では36業種もの伝統産業が集積している。まずは養成施設をしっかりと固めることが大事だが、その先も見据え、例えば、山中漆器や九谷焼などの他産地と連携しながら、集積地としての強味を世界に向けて発信していくべきではないか。
- 経済産業省と文化庁が連携して、我が国のコンテンツ産業の海外展開を推進しているが、工芸は非常に潜在力があって伸び代があるためしっかりと取り組んでいく必要がある。また、事務局から説明があった養成施設での産業観光の機能について、文化観光という側面も大きい。国では文化観光の支援を年々拡大しており、今回のプロジェクトでも活用できればいい。最後に、個々の職人や事業者で人材育成をすることは徐々に困難になりつつある。業界全体としてそれに取り組もうとする今回のプロジェクトは先見の明がある。その際、これまで輪島塗の高いブランド力の維持継承に大きく寄与してきた石川県立輪島漆芸技術研修所や輪島塗技術保存会との連携によって、相乗効果を生み出すための具体的な方策を検討いただきたい。

- 輪島市が措置した世界ブランド化推進事業とも連携しながら、関係者が協力してプロジェクトを進めることで、日本を代表する唯一無二の漆芸技術である輪島塗を、震災を機により高みに持っていけるのではないかと。
- 今回のプロジェクトができたのも、残念ながら、昨年の能登半島地震と奥能登豪雨の凄まじいダメージがあったからこそ。能登の価値観こそ日本のふるさとの文化であると世界に発信できる。その肝になるのが、輪島塗を伝承するための人材確保と市場開拓。市場開拓のためにも塗師屋にいい人材をどんどん出していき、この循環を良くしていく必要がある。他の委員から発言があったように、人を集めてその気にさせていくという取組みは今年からでもできるのではないかと。
- 輪島塗は他の産地と異なり、120もの工程が分業化されている。これは、近代的な生産手段が既に輪島塗の中に入っているということであり、この輪島塗を守り、さらに拡大させていくことは、輪島塗のためだけではなく、日本工芸全体にとっても非常に参考になる。
- また、工芸を世界に普及させるということは、日本文化を知ってもらうこと。日本文化とは「アカセキレ」で表現される。アは安全で、カは確実で、セは清潔で、キは規律で、レは礼節。これが工芸には込められる。そのため、それをしっかりと位置づけて、そして今以上に世界に知ってもらうことは、日本文化の存在感を国際社会の中で高めるということにもつながる。それほど、今回の事業は重要。先ほど他の委員が発言したように、勉強会などソフト面を前倒ししてやっていくのは、広報にもつながるので、それに取り組んでいくことも十分に考えられる。

以上